

## I. 研究背景

日本の在日外国人のうち中国国籍者数は過去最多となり、「永住者」資格者数及び中国国籍の在日外国人と母親が中国籍である出生総数も最多となった。外国籍の女性が異文化において育児を行う際には、葛藤や不安、ストレスが生じること、十分なソーシャル・サポートが得られなければ、産後うつになる確率が高いことなどが指摘されているが、在日中国人女性の育児に関連する研究はほとんどみられない。

II. 研究目的 在日中国人女性が異文化における育児で経験した困難と対処のプロセスを明らかにする。

## III. 研究方法

研究デザインは質的記述的研究とした。研究協力者の条件は、日本で出産・育児を経験した在日中国人(新華僑)女性で、幼児～学童の子どもを育てていること、中華人民共和国出身の首都圏近郊に在住の中国人女性とした。夫の国籍は中国と日本の両方が含まれるようにした。リクルート方法は、在日華人交流協会や在日外国人支援を行う NPO 団体等に依頼し協力者を得る Convenience Sampling と、協力者に紹介してもらう Snowball Sampling を併用した。その結果、8 名(38.8±6.2 歳: 範囲 33~45 歳)の在日中国人女性の協力を得て半構造的面接を行い、収集したデータについて分析した。来日後出産までの年数は 4.8±3.8 年(範囲 1~8 年)で、7 名が第 1 子より日本で出産していた。

## IV. 結果

育児経験で遭遇する困難は《日本の文化的な母親をイメージできない》、《異文化の見えない壁に遮られる》、《異文化の中で自分がわからなくなる》の 3 つの段階が抽出され、すべての段階で共通する対処方法として《予期できぬ困難に学習を重ね対処する》が抽出された。本研究の目的は、育児を行う上で体験した困難と困難への対処のプロセスを明らかにすることであったが、目的の他に困難への対処を繰り返すことで得られるものとして《母親としての新しい自分を見出す》が、困難と対処に影響するものとして、《困難を乗り越えるために必要な礎》と《個人の持ち合わせた要因》が抽出された。子どもの成長に伴い新しい日本の文化に接触するたびに、困難の 3 つの段階を繰り返していた。

## V. 考察

親族の共同体の中で育ち、母親のロールモデルや日本の文化的な母親のイメージを持たない在日中国人女性は困難への対処を繰り返す過程で、思考錯誤学習や日本人の母親の行動示範(モデリング)から学ぶ観察学習や模倣学習を行い、日本と中国の文化特性を持つ母親像を確立し、新たな自己の枠組みを持つ《母親としての新しい自分を見出す》経験を行っていることが示唆された。また、Pedersen の異文化適応に至る「5 段階モデル」との類似性を見出したことから、育児を始めることで日本の文化との接触を避けられず文化変容を迫られ、《母親としての新しい自分を見出す》経験と同時に、自文化との摩擦で生じる困難に対処しながら、異文化への適応を経験していると考えられた。

母子保健サービスへのアクセスと利用の障壁を取り除き、在日中国人女性のニーズに合った育児支援を受けられるようにする策が示唆された。在日中国人女性は育児の過程で文化の再統合とアイデンティティの再構築を同時に迫られ、アイデンティティが脅かされるなどの困難に陥る可能性があるため、異文化への適応を支援する必要があると考えられた。危機的な状況から個人や家族をまもる予防機能を持ち、環境調整やアドボケイトを行い母子保健サービスへ反映させることができる保健師は、在日中国人女性の育児を積極的に支援する責務があると同時に、それが可能な専門職だと考えられた。在日期間の認識の違いを生むと考えられたため、今後は個人の背景、居住地域別に困難や困難に関連する要因、必要な支援を比較検討し母子保健システムの構築や多文化共生の地域づくりに生かす必要があると考える。